

## 新刊紹介 長山直治著 『寺島蔵人と加賀藩政 : 化政 天保期の百万石群像』

著者	中野 節子
雑誌名	北陸史学
巻	53
ページ	82-85
発行年	2004-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9590">http://hdl.handle.net/2297/9590</a>

長山直治著

『寺島藏人と加賀藩政』

——化政天保期の百万石群像——

中野節子

今後の加賀藩後期の研究は本書と向き合うところから始まることになろう。本書には化政天保期における藩政の展開が詳細に書き込まれている。

本書を簡単に紹介すると言う事ならば、目次を書き上げればよい。そこには著者の考察が、丁寧に順序よく並べられている。例えば第十章は次のようである。

第十章 齊広の隠居と教諭

齊広の隠居所をめぐる前田直時との文通

直時への書状に見る齊広の人となり

竹沢御殿の造営

五か年格別省略と取箇符合の詮議

風俗刷新の布達と続出する藩士の非行

齊広の隠居と能

教諭の開始

まぼろしの教諭局

藏人の教諭方主付就任

教諭の実際

齊広の死

上書「口達之覚」と藏人の逼塞処分

本稿では、目次による紹介を止めて、筆者なりの印象から四つのポイントで紹介することとする。一は本書における十二代藩主齊広の位置、二には藏人と齊広との類似性、三には齊広時代の藩政における藩主と年寄の関係、四は百万石群像について、である。まず一から述べていこう。

一

本書を読んでいくと、主人公は藏人でなく、齊広ではないかとさえ思えてくる。

享和二年（一八〇二）に齊広は襲封した。天明二年（一七八二）生まれで二十一才であった。翌享和三年、藏人は高岡町奉行になっており、当時二十七才で、齊広とほぼ同世代であった。

齊広の政治を特徴づけたもの一つに「御国民成立仕法」がある。その内容は困窮している藩士・農民・町人を共に救済し生活を安定させることにあったと言う。有名な文政

二年（一八一九）春の十村断獄もこの線上にあった。文化末年の改作方復古や引免立帰り仕法が成果を上げず、財政難から抜け出せないことに斉広は強い不満を持っていったという。そこで、斉広自身農政の改革に乗り出すことにし、森九郎兵衛らが政策立案に当たった。改作方復古などの不成功の元を正せば、改作奉行らの心得の悪さにあるとの結論に達した。まず、改作奉行の大幅な交替、そして、十村断獄が行われたのである。処罰された十村に替わって新十村が配置されたが、彼らに伝えられた斉広の考えは、小農民の救済という点と年貢増徴にあったらしい。新たに登用された十村達は実力がなく政策は失敗に終わった。

もう一つ斉広の政治を特徴づけたものは「教諭」である。御国民成立仕法が挫折した後、文政五年に斉泰が襲封し、斉広は隠居して竹沢御殿に移った。斉広は、中・下級家臣のみでなく、家老、人持組の家臣にまで及ぶ士風の退廃に危機感を抱き、矯正のため、竹沢御殿に家臣を呼んで教諭を与えた。蔵人はここで斉広の教諭を実施する教諭方主付に任命されている。斉広の最後の政治に関わったわけであるが、蔵人はそこで斉広の本心に惹かれたようだ。その点は二、で述べよう。

斉広は決して判りよい人物ではない。儉約を唱えて窮民を救おうと言う一方で、費用を費やして竹沢御殿を建て能

を頻繁に催おした。著者は、家臣の書状から斉広の性格を、政策に強引なところがあつたのとは裏腹に、繊細な人柄と述べている。

## 二

斉広は隠居後、竹沢御殿で「教諭」を行ったことは先に述べたが、蔵人は教諭方主付として斉広の最後の政治に参画している。この時蔵人は斉広の側近くに仕え、斉広の思いが自分と同じだと確信したと言う。蔵人はそれまで斉広の心情を理解していなかった。蔵人は斉広の行った十村断獄を阻止しようとし、遠慮を申し渡されたこともある。

斉広の願いは、万民を安穩に暮らせることにあり、また、風俗も質朴な風俗を理想としていた。ところが蔵人からみると、斉広の思いと全く異なつた政治が行われており、それは藩政を補佐し執行している者たちが、斉広の思いを真摯に受け止めていないからだと考えた。蔵人は年寄たちに不信任を持つ。文政七年、斉広の死後、蔵人は年寄たちに「口達之覚」を出し、斉広晩年の教諭の政策を守るよう求めるが、斉広の政策は段々否定されていく。文政九年の五月、斉広が嫌っていた増借知が行われ、その直後に前例のない七千貫匁の御用銀の徴収が命じられた。翌六月には斉広と関係深い藩士達が多数処分され、さらに七月には風

俗関係の布達が出されて、齊広が禁じていた琴・三味線・鳥構が解禁される。

著者は藏人の思想の特徴を次のように語る。最後まで改作法を理想とする復古的農本主義者で、藩主は民に安定した生活を送らせるために存在するのだと主張、困窮民衆に対し深い愛情を寄せ、その特徴は民衆救済を果たしていない藩政を痛烈に批判するところにあった。

著者は、藏人は才力と気力を兼ね備えた人物で現状批判は詳細で鋭い、しかし、対処方針では改作法の精神に戻ることに、真心を持って政治に当たることを主張するのみで、具体策に乏しいとする。齊広にとっても、藏人にとっても困窮民衆救済の立場に立っていたが、それを実現する方法を見出していなかった点に、両者の類似した心情がみえる。齊広死去後、藏人は齊広の政策が次々と打ち消されていくことを嘆き、藩政批判を行って能登島に配流されたのであった。

### 三

本書には齊広と年寄との関係が述べられている。

文化元年（一八〇四）四月には、齊広は、以後は毎日居間書院に出席して、年寄などから政務について伺いなどを受けたいと、政務に取り込む意欲をみせていたが、文化三年

四月以降の状況を見ると、定められた日にしか出席していなかったという。藩主の意向によっては、年寄を中心とした政務に干渉し、親政を敷くことも出来たが、藩主の積極性がなければ、年寄を中心として政務が行われることになる。

年寄たちが藩主齊広に政治向けの忠告を行うこともある。文化五年の城内大火で二の丸が焼失した二ヶ月後、家老の前田道済と本多政養は藩主に面会して、家中諸士下々に對して「御敵政」を加えるようにと申し出ている。齊広初期の緊張感が薄れ家臣の風俗が柔弱になっていると云うのである。

文政元年八月、勝手方主付であった本多政礼と奥村為質が急に罷免され、替わりに前田孝友、村井長世、前田直時が任命された。この時の役職交替は年寄だけではなかった。齊広による親裁体制強化の人事であった。この三人の勝手方主付の内、孝友と長世は対立していた。これに悩んだ直時は、病気で引き籠もっている齊広に、書状で窮状を訴えた。この時、直時は藩主からの書状を受け取る。その内容は、年寄中の不和は今に始まったことではない、自分（齊広）も色々工夫したが行き届かなかった、との内容であった。

ここからは藩主と年寄の微妙なバランスを感じる事が

出来よう。藩主は自分の裁量で年寄の役職を取り替えることが出来たのであるが、一方で年寄の統制は出来ていない。年寄制度は藩主親政に対する抑制効果も持っていたと言えよう。

#### 四

本書の副題に「百万石の群像」とあるが、事実、本書の登場人物は多く、またそれぞれの人物が丁寧に描き込まれている。幾人かを上げてみよう。

三国与兵衛。越前三国近くの泥原新保村出身で、三国の廻船問屋宮腰五郎兵衛の元で働いて独立した。文化十四年に福井藩から五人扶持を与えられて、三国与兵衛を名乗り、三百石の知行を与えられた。三国与兵衛は文化十三年、大坂商人に代わって加賀藩の廻米を一手に引き受けることになった。石川県ではもちろん、地元の福井県でもほとんど知られていない人物だという。著者の新人発掘である。

森九郎兵衛も発掘された人物と言えよう。彼は斉広の御国民成立仕法を執行した一人である。森は「国病論」を書いて斉広に提出したが、その内容は年寄政治の批判で、年寄政治に不満を抱いていた斉広の心を捉えたのだという。十村断獄、仕法調達銀などの政策の背後には、世界情勢や天文などに通じた彼がいた。

これまで紹介されている人物であっても、本書の中で精彩を放ち始めた人々もいる。十一代藩主治脩、蔵人の父親原元成、藩臣では前田直方、本多政養、村井長世、本多政礼、井上井之助、奥村為質、村井長道、奥村栄実、また、金沢を訪れた学者、浦上玉堂など。

本書を読み進めると、当時の人々が脳裏を去来し、まさに「群像」となって心に刻まれていく。

本書を読み終えると、加賀藩の文化・文政・天保の時代が相当の重さを以て心に蓄積される。事実を丹念に調べられ述べられているので、逆説的なようだが、読者は自分なりの化政天保期を描いていけるような錯覚に陥る。このような変則的な紹介を生み出したのもその錯覚が原因だという気がする。一般書と言うより専門書である。ただし、親切に名前や歴史的事象にルビを振り、歴史的事項を説明している。一般読者への配慮であろうが、私も大変助かった。ともかく、本書のために費やされた著者の膨大な貴重なエネルギーを思う時、泉鏡花文学賞の受賞も納得されるのである。(二〇〇三年九月刊、桂書房、二〇〇〇円)

(金沢市長土塚二一―二四一九〇二)